慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

令和元年度 三四会全国支部長会開催

異常気象の続く中、令和になって初めての全国支部長会が11月2日(土)18時から京王プラザホテル本館43階で開催され、全国から27名の支部長に参加していただいた。今回は2020年に三四会設立100年を迎えることから、三四会100年記念行事特集と題して行われた。

開会前に塾歌を斉唱し心を引締め支部長会に臨んだ。司会は支部担当理事の堀内行雄(52)が務めた。挨拶や報告など以下の順で行われた。武田純三会長(52)の開会の辞と挨拶で開会した。挨拶の中で、三四会の歴史、教育や奨学金の現状の話、一年間の活動報告と支部長への感謝を述べられた。次いで、武田和夫山形県支部長(40)に、支部長代表挨拶をしていただいた。挨拶の中で、地方三四会支部の状況や教育の重要性に触れられた。天谷雅行医学部長(64)は、本年10月から2期目になり、竹内・天谷・北川体制で今まで同様、ワンチームとして活動していくことを述べられ、参加された支部長に新病院棟建設への協力の感謝と医学部としての取組みの中で今後更なる医学部教育の重要性を強調され、地方出身者の入学減少防止のためにも奨学金の充実が必要であることを強調された。陣崎雅弘副病院長(66)は、働きやすくなった新病院棟の現状、北川タスクホースなどを説明し感謝の意を示された。慶應義塾大学病院の歴史と病院100周年の話をされ、2018年10月にAIホスピタルモデル病院に選定されたことなどを説明された。

三四会は2020年に設立100年を迎え、2つの行事が予定され、1つは2020年6月13日(土)三四会評議員会後に、三四会単独で行うもので、2つ目は2020年11月21日(土)に、同じく100周年を迎える慶應医学会と慶應義塾大学病院と一緒に合同記念式典を開催する。前者について、渡辺真純副会長(64)から記念式典、リー啓子副会長(60)から記念誌作成、古梶清和副会長(63)から記念品とロゴ作成について、現況を説明し支援と協力を求めた。

その後、例年の如く1年間の三四会の活動報告と来年度の活動計画の説明などが行われた。まず、末岡浩理事(59)が三四会員から新病院等建設関連の募金銘板の経緯について報告し、近藤太郎理事(68)は、三四会員で医師会役員をされている先生方との座談会を企画し、現在連載中であり、ネットワークづくり活動を進めることを報告した。次に、渡辺副会長から、赤倉山荘の昨年の運営状況と今年度の対策、及び2週前に開催された連合三田会での三四会活動の報告と既に配布された「医学部100年記念誌」の三四会の医学部への協力についても報告があった。最後に、宮川義隆理事(70)から、新企画として、現在塾外で活躍する大学連携のキーパーソンを訪ねてお話を聞き、本誌に連載中の大学連携「医人口承」について報告した。最後にリー副会長の閉会の辞で支部長会を締めくくった。

その後、懇親会場に移動し懇親会が執り行われた。司会は堀内が務め、武田会長の感謝の言葉で懇親会が始まった。北多摩南支部山本光興支部長(41)の挨拶と乾杯の音頭で杯を交わした。その後、しばしの歓談の後、山澤文裕理事(60)から、三四会員の産業医活動を推進するため活動中の産業医委員会の昨年度の活動と本年度の活動計画が報告された。次に武田三四会長から、三四会の歴史、100年記念事業のことや、三四会の現状とこれからのあり方などについて三四会会館の構想などを含めて、丁寧な説明があった。続いて、本年は執行部改選の年でしたので、新執行部役員で参加された金井隆典医学部長補佐(67)、大家基嗣副病院長(66)、長谷川泰延副病院長(63)、福永興壱病院長補佐(73)の各先生にご挨拶をいただいき、新執行部就任をお祝いした。

その後、歓談しながら、例年の如く各支部長から各々の三四会支部の近況が報告された。参加された支部長は、武田和夫(40)、山本光興(41)、片山義郎(44)、岡田菊三(46)、福岡利之(46)、鈴木彰(51)、多田紀夫(51)、日原弘(51)、宮本京(51)、山上惠一(51)、飯野孝一(52)、秋田博信(53)、家田和夫(53)、稲垣稔(53)、北井啓勝(53)、田中義(53)、増田純一(53)、磯部潔(54)、市瀬裕一(54)、長浜秀策(54)、長倉和彦(55)、川合眞一(56)、高宮眞樹(57)、西村正智(63)、渡辺真純(64)、守瀬善一(66)、田坂定智(69)(敬称略)の計27名であった。

最後に、恒例の「若き血」を応援指導部OB鈴木悠史君(93)の指揮で肩を組みながら斉唱しエールを送った後、古梶清和副会長の閉会の辞で懇親会を締めくくり散会となった。

（堀内行雄　整52回）

リトアニア共和国大統領夫人が来塾

2019年10月23日、ディアナ リトアニア大統領夫人が慶應義塾大学信濃町キャンパスに来塾されました。

はじめに、慶應義塾大学病院1号館6階で小児科の高橋孝雄教授、山岸敬幸教授より小児系総合病棟の概要説明が行われました。続いて、NICU（Neonatal Intensive Care Unit: 新生児集中治療管理室）において、有光威志助教より当院で2668グラム・妊娠24週で出生した超低出生体重児の男児に対する治療管理の説明や、大きな合併症もなく元気に退院したエピソードが紹介されました。続いて訪れた小児病棟では、リトアニアの国旗を手作りして出迎えた子供たちや医療スタッフに温かい笑顔を向けられ、子供たちとの交流を喜ばれました。

その後、総合医科学研究棟へ移動し、臨床遺伝学センターの小崎健次郎教授より、国立研究開発法人日本医療研究開発機構が主導し慶應義塾が主要拠点である、未診断疾患イニシアチブ（IRUD：Initiative on Rare and Undiagnosed Diseases）の取り組みについて説明が行われました。IRUDは、診断がつかない患者さんの遺伝子を幅広く調べ、その結果を症状と照らし合わせることで、診断の確定を目指しています。IRUD事業で培った技術をもとに、臨床遺伝学センターは31名の診断不明のリトアニア人患者さんの解析を行い9名（29%）について診断を得たことが説明されました。大統領夫人は大変に感激され、研究室メンバー全員と握手をなさいました。

今回の来塾は、リトアニア共和国との小児難病・未診断疾患研究における協力関係の一層の発展に向け、有意義なものとなりました。また、福澤諭吉先生はリトアニアを初めて訪れた（1862年）日本人の一人と言われており、157年を経てリトアニア大統領夫人が来塾され一層の親善が深められたことに、リトアニアと日本、慶應義塾の縁の深さを感じる機会となりました。

―2019慶應連合三田会大会報告―
共に讃えん社中の絆

三四会理事（連合三田会担当）　深川　和己（68回）

さる10月20日に慶應連合三田会大会が日吉キャンパスにて催行されました。今年のテーマは「共に讃えん社中の絆」でした。前週末の台風接近が嘘のように晴れ、来場者数も2万2千人を超える大盛況でした。

医学部卒業生としては、連合三田会から委嘱された「救護部会」として卒後30年目の佐々木淳一救急部教授を中心とした68回生のメンバーと、三四会後援のイベント／模擬店など「イベント部会」として70回生（卒後28年目で今年の連合三田会大会執行部と小中高で同期）の各務宏先生を中心としたメンバー、さらに赤倉山荘模擬店では三四会赤倉山荘運営委員会とKAAの学生委員が大活躍し、医学部のプレゼンスを高めていただきました。

三四会後援のイベント／模擬店としては、①恒例となった「医学部講演会」、②毎年大人気の「ブラックジャックセミナー」、③家族連れに大人気の「ドクターに挑戦コーナー」、④慶應義塾赤倉山荘模擬店の4つのイベントが行われました。1年を通じて準備を行い、当日も忙しく楽しんでご協力いただいた関係各位に、心から感謝いたします。ありがとうございました。

塾生注目！来年も10月第3日曜日（2020年10月18日）に日吉キャンパスにて開催されるのでありますぜひ皆で集い、とても楽しく、懐かしい一日を過ごそうではありませんか！

【救護部会】

はじめに、当日は天候にも恵まれ、2万1千人を超える多くの来場者がありましたが、重大な救護活動が必要な事案の発生はなく、無事に救護部会としての活動が終えられましたことを報告させて頂きます。

今年の救護部会の人員構成は、部会長を68回の佐々木が担当し、副部会長を68回の深川和己君、山岸敬幸君、渡邊宏治君という3名、さらに68回（130回）として医学部12名・厚生女子学院15名、78回（140回）として医学部8名・看護医療学部7名、88回（150回）医学部7名が参集し、総勢56名のチームで救護対応を行いました。

今年はまだ新日吉記念館が竣工していないため、昨年同様に主たる式典等は日吉会堂（慶應義塾高等学校）を使用する変則開催でした。このため、昨年開催時（129回運営）の経験等を参考にして、救護部会としての体制を再検討しました。約1年間の検討・準備を行い、効率的な救護活動を行うために、救護本部（日吉保健管理センター）に加え、卒後50年用控室を使用し主イベント会場である日吉会堂への対応も可能な接待部会兼用高校内教室、人通りが最も多い並木坂上案内所横、最大の飲食・休憩スペースに隣接した第4校舎前の合計4カ所の救護所を設置し運営を行いました。

また、熱中症、飲酒対策としてのミネラルウォーター配布を兼ねて、会場内見回り監視隊に同行し、来場者への注意喚起、要救護者の発見などを行いました。

最後になりますが、例年同様に多大なご協力を頂きました日吉保健管理センターの皆様に心より御礼申し上げます。

（救急医学　佐々木淳一　68回）

【医学部イベント】

医学部イベントとして、70回が「ブラックジャックセミナー」「ドクターに挑戦！」を担当しました。「ブラックジャックセミナー」は企業共催による子供向け手術体験セミナーで、外科学教室の全面協力のもと、80回外科チームが約50名の指導に当たりました。250名近い応募の約5倍の大変な人気で、本格的な外科学体験は、子供のみならずご父兄も大変満足されていました。名称変更予定もありますが、外科の素晴らしさを伝える機会として継続したいと考えます。

「ドクターに挑戦！」も子供向け医療体験型イベントで、救急医学教室、医学教育統括センター、看護部、KAPPA、協賛企業の協力のもと、救命救急、血圧測定、内視鏡、眼科手術、脳血管内手術体験を行いました。ゲーム型の心肺蘇生など実生活でも役立つ体験もあり、子供たち200名以上とそのご父兄に参加いただき、スタッフも休みなしといううれしい悲鳴の中、医療の重要性を実感していただけたと自負しています。

医学部のイベント参加は10年未満ですが、着実に根付いてきています。ご協力、ご支援いただいた三四会の先生方、関係者皆様のおかげであり、改めて御礼申し上げます。またお手伝いいただいた70回の同期に深く感謝しています。今後他部門同様、医学部も10年ごとの代と協力していく体制も社中の絆を深めるために良いかもしれません。来年も三四会会員の皆様およびご子息様の多数の参加をお待ちしています。

（脳神経外科　各務　宏　70回）

【医学部講演会】

今年の講演会「医学部発！ベンチャービジネス」は、午後1時より独立館で開催された。講師の窪田良君（70回、眼科）と、佐竹晃太君（86回、呼吸器内科）は、医療系ベンチャーの創立者である。窪田君は慶應義塾高等学校から塾医学部に進学。虎の門病院眼科に勤務後、アメリカのワシントン大学（シアトル市）に留学した。留学中に、世界から失明を撲滅するため、2002年にAcucela Incを設立した。その後、東証マザーズに新規上場し、眼科難病に対する新薬、NASAによる人類の火星探査計画を目標に、超小型眼科診断装置の開発を進めている。

佐竹君は桐朋高校から塾医学部に進学し、卒業後は日本赤十字医療センター呼吸器内科に勤務した。卒後6年目に中国で経営学修士（MBA）、翌年アメリカのジョンズ・ホプキンス大学で公衆衛生学修士号（MPH）を取得した。米国留学中に出会った「ソフトウェアで治療ができる」ことにヒントを得て、2014年に㈱キュア・アップを創業。ヨット部の後輩にあたり、プログラミングに詳しい、鈴木晋君（89回）を最高開発責任者として迎えた。その後、ニコチン依存症、高血圧、非アルコール性脂肪肝の患者の生活習慣を、アプリで変える臨床試験を進めている。

講演参加者から失明を防ぐ新薬への期待、医療機器の価格を抑える提案、優れた人工知能アプリと医療者の役割分担などについて、積極的な質問が出された。連合三田会本部、他学部からも多くの参加者を迎え、医療系ベンチャーに対する関心の高さが伺えた。

（宮川義隆　内70回）

【慶應義塾赤倉山荘模擬店】

今年も例年通り、並木道に「慶應義塾赤倉山荘ブース」を設営・運営致しました。三四会の多大なるサポートを受けて赤倉山荘実行委員・慶應赤倉アカデミー（KAA）の学生委員と一緒に、妙高高原を宣伝すべく子供達に大人気の観光キャラクター「ミューコーさん」も登場して名物の温泉饅頭を塾員に皆さんにお配りしました。

例年は午前中の早い時間帯に配り終わってしまう温泉饅頭を、今年は午後からの参加や帰り道に赤倉山荘ブースに立ち寄って頂く塾員の方々のために確保しておき配りました。また3年前からブースを飾る色とりどりの風船を、将来の塾員になるであろうお子様達に配り大好評でした。

創立時の赤倉山荘に宿泊された経験のある塾員の方々からは、パネルに貼られた夏と冬の赤倉山荘や野尻湖・妙高山の風景をご覧になりながら昔話をお聞きすることが出来ました。

毎年3月の最初の週末に開催される恒例の「赤倉山荘スキー&スノーボードツアー」は、2020年3月6日（金）～8日（日）です。7日（土）からの途中参加（1泊）や日帰り参加も大歓迎です。三四会員とご一緒に塾員の皆さんもお誘い合わせの上ふるってご参加をお待ちしています。

（赤倉山荘実行委員　中道　司　67回）

救護部会の参加者たち

毎年大人気の「ドクターに挑戦！」

講演会演者（左から宮川、窪田君、佐竹君）

赤倉山荘ブースにてミューコーさんと

割引15%適用

三四会員専用
勤務医師賠償責任保険・団体募集のご案内

本年も三四会員専用の勤務医賠償責任保険の募集を行います。

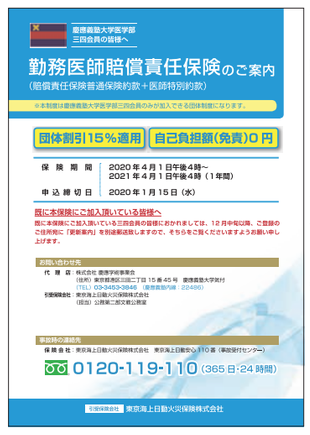
本新聞に同封の商品パンフレットをご参照頂き、パンフレット挟み込みの加入依頼書に必要事項をご記入頂き、同封の返信用封筒にて㈱慶應学術事業会宛１月15日（水）迄にご送付ください。

本制度は三四会員のみ加入可能で、ご加入されると日本国内全ての医療機関にご勤務中、万が一の医療事故に対して補償がされます。

尚、2020年４月１日より、従来の補償に加えて新たに「刑事弁護士費用担保」が、現行の掛け金（＝保険料）のままで追加されます。

本補償は、従来まで補償対象外となっていた、医療事故により刑事訴追を受けた際に生じる弁護士費用・訴訟費用を補償するものです。具体的には、日本国内で行った医療業務に起因して業務上過失致死傷罪の疑いで送検された場合等に適用されます。詳細は同封のパンフレットをご参照下さい。

皆様の勤務先の医療機関でも病院としての賠償責任保険に加入している事が殆どですが、昨今の医療事故では、医療機関のみならず事故に関係する医師個人が直接訴えられるケースが増えてきています。医師個人が訴えられた際には、医療機関が手配している保険では対象となりません。



また、臨床研究や再生医療に関しては、医療機関が通常手配している賠償責任保険では対象にならないため、その様な研究・医療に参画される際には、本制度により確実に補償をご手配される事が必要です。

既に他の同種補償にご加入されていても、本制度にご加入頂く事は可能です。重複してご加入された際には、既存の補償と合算され、既存の契約が満期を迎えるまでの間は一時的に補償額が大きくなりますが双方共に有効な補償となります。

つきましては、三四会員専用の勤務医師賠償責任保険に奮ってご加入頂きますようご案内申し上げます。

三四会新病院棟建設協力者銘板のお知らせ

新病院棟１号館の完成を記念して多大なご貢献を頂きました個人・団体・法人を顕彰し、１階ホスピタルモールに銘板が2019年３月に設置されました。募金活動は当初、慶應義塾創立150年記念事業募金として2005年から５年間にわたる募金活動が行われましたが、その後に2013年より医学部創立100年記念新病院棟建設事業募金として改めて開始された経緯があります。150年記念事業募金につきましては、すでに三田・日吉キャンパス内に銘板が設置されております。しかし全募金期間を通して新病院棟建設に対する多大なご貢献を賜りましたが、既に設置された信濃町の銘板に掲出されておられない方々に対して、心からの感謝の意を表し、三四会が新たな銘板を作成して信濃町（三四会内）に顕彰することにいたしました。現在確認の作業のためのご案内をお送りしております。内容をご確認の上、ご返送をお願い申し上げます。

慶應義塾大学医学部三四会
新病院棟建設募金事務局
お問合せ先　TEL／FAX　03-3356-5568
（電話受付：平日10:00～16:00）

鑑賞知来

パラリンピックは第2次世界大戦で負傷した兵士たちのリハビリの一環として英国で始まった。1988年のソウルからオリンピックの後に同じ場所で開催されるようになり、その翌年に設立された国際パラリンピック委員会が本年9月に30周年を迎えた。今日、パラリンピックはオリンピックに比肩する極めて競技性の高い国際スポーツ大会へと進化し、障害を持つアスリートの活躍が連日メディアを賑わせている。

パラリンピアンの障害は視覚障害や知的障害から、我々整形外科が診療する麻痺や四肢の変形・欠損など多岐にわたり、その背景も先天性、外傷（戦争）、疾病など様々である。障害の種類・程度に応じた細かなクラス分けにより競技の公平性が担保されるため、例えば陸上100m走では、16に分けられたクラスごと、それぞれに金銀銅メダルが授与される。見方を変えれば、パラリンピックの「障害なし」クラスがオリンピックなのだ。

今秋はラグビーワールドカップに日本中が熱狂した。日本代表の活躍も大きかったが、『ワンチーム』、『ノーサイド』に象徴されるラグビーの精神、そして鍛え上げられた身体が躍動するという、スポーツの根源的な悦びに多くの人が魅了された。体格のいい旅行者が自国のユニフォームを着て街中を闊歩し、子どもたちは公園でラグビーをして遊び始め、ラガーシャツを着て私の診察室に入ってきた患者さんも少なくなかった。史上類をみない天災に襲われた秋でもあったが、スポーツが人々の心に光明をもたらした。

時代は令和となり、いよいよ来年は東京で初の夏季『オリ・パラ』が開催される。障害の有無に関係なく、世界中から集結するトップアスリートの躍動を我々は目の当たりにし、体感するであろう。彼らの活躍を通じて、障害を持つ人への理解が広がるだけでなく、スポーツの力で寛容で明るい社会に近づくことを願う。

（中山ロバート　整80回）